

優秀賞

— 教育委員会教育長賞 —

熱意ある若者が集う福島をつくる

地域に対して熱意ある若者が集い、大人や上の世代を巻き込んで福島県人全員が一丸となってまちづくりをする社会をつくりたい。また、この活動と共に、福島の学生が夢を見つけるきっかけづくりをしたいと考えている。そのために私は、地域の復興やまちおこしを目的とするNPOに所属し、経験を積んだ後に、独立して組織を立ち上げたいと考えている。

当たり前が当たり前ではなかったことに気付かされた2011年3月11日に起きた東日本大震災。先日の東京オリンピック2020では、一部の参加国が福島県産の食材や生花を使用することに、否定的な意見を挙げたことが問題になった一方、福島県で開催されたソフトボールの米国・オーストラリアの監督が福島県産の桃を「美味しい」と発言したことも話題となった。震災から10年が経とうとしている現在でも、「ふくしま」に対するイメージは未だに、震災・津波・原発事故というネガティブなイメージが根付いている。私はこれを、「ふくしま」のウチから全国、世界に向けたソトに福島県人全員で言葉を、魅力を、発信して伝えていかなければならないと感じた。

その一方で、震災をきっかけにたくさんの若者が東北に訪れた。3.11をきっかけに彼らが「東北」という価値観を発見し、社会や地域のことを考える若者が増えていくと、SNSを利用して、またあらゆるコミュニティと関わることで実感した。

私はSFF|福島人が営む集会所、その中で高校生のための「郡山の集い」で活動している。自分のアイデアやアクションを共有し、フィードバックし合うことでその後の行動に繋がるヒントを得る場である、認定NPO法人カタリバが運営する「マイプロジェクト」に参加した。やってみてわかったことが大きく3つある。まずは、「繋がり

福島県立郡山高等学校3年 ^{コンノ}紺野 ^{ヒナ}陽奈

の繋がりを生む、人と人のネットワークは広がれば広がるだけおもしろい。

そして、地域のコミュニティは私たちの世代のものだけではなく、上の世代と協働していかなければならない。学生だけではやれることに限界がある。大人の力も借りて活動することで、出来ることの可能性も増え、応援して下さる支援者も増えてくれるにちがいない。

また、この企画には、88プロジェクトがエントリーしていた。その中で福島県は3プロジェクトしか出ていない。また、石川県や埼玉県のチームが多くいた。そして、私は個人的にこのプロジェクトを見つけて参加したが、他のチームは多くが先生の紹介でやってみた、という学生が多くいた。福島にはそのような知る機会はない。要するに、福島の学生にこういった学生が主体に活動できる機会を知るきっかけがないという問題があると気づいた。

このように意識を変化させてくれた「出会いのきっかけ」は、もっと多くの高校生に与えられるべきだ、と考えるようになった。なぜなら、同世代の学生がおもしろいアクションしていることの刺激を受け、多様なアクション・アイデアに触れることで自分の可能性が広がるからだ。

私が今福島地域活性化に向けてできることは、私が福島を好きだと周りの人に伝えることである。なぜなら人の感情は他者の感情へ移り変わりやすいものであるとこの一年間の実践してきた上で私の友人が発する福島言葉はネガティブからポジティブに変化したからである。

したがって、地域を高校生自らが輝けるきっかけにし、そこからさらに学生や大人を巻き込んで、若者を主体とする福島県人全員で、地域を変えられるんだという自信が持てるような社会を目指して活動していきたいと考えている。